JMR

日本宣教ニュース

NO. 16　2019 年 9 月

東京基督教大学
国際宣教センター
日本宣教リサーチ
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」（コロサイ１：6）

【巻頭言】

「教会難民」を忘れずに

日本同盟基督教団 土浦めぐみ教会
顧問牧師　清野 勝男子

興味深いアンケート調査結果を紹介します。当教会の萬代 望氏が2018年に行った、「日本人の宗教意識と幸福度」に関する調査（「茨城県立医療大学紀要 第24巻」に所収）で、日本全国の地域・性別・年齢の層化無作為抽出により男女1､000人ずつ計2､000人（年齢20歳～69歳）からの Web アンケート調査です。巻頭言のテーマに関係する興味深い回答の一部を紹介します。

【質問１】あなたの家にあるものがあれば、いくつでも挙げてください。
【回　答】仏壇28.8%、御札27.7%、神棚15.7%、パワーストーン9.8%、水晶6.1%、
マリア像1.8%、ロザリオ1.7%、キリスト像0.9%、十字架2%、聖書5.6%

聖書を自宅に持っている人が、5.6%もいることは大きな喜びです。統計上のクリスチャン数の５倍もの人々が聖書を自宅に持っておられるということは嬉しいことです。もっと大胆に､聖書を日常会話の話題にしても良いかもしれません｡しかし､水晶を持っている人が6.1%もいることには驚きです。人間ってやっぱり何かに頼りたいのでしょうか。

【質問２】家の宗教はありますか？
【回　答】仏教 40.7%、家の宗教は無い 51.6%、神道 3%、キリスト教 2.3%
【質問３】あなたは現在宗教を持っていますか？
【回　答】仏教 25.6%、持っていない 67.6%、神道 4%、キリスト教 3.1%

質問３は極めて率直な質問で、回答者はしっかりした確信をもって回答せざるを得ないものだったでしょう。そうだとすると最後の結果はちょっと驚きです。日本のクリスチャン人口は1%以下だと言われています。しかし、この調査結果では3.1%でした。

キリスト教に親しみを持っている日本人は意外と多いかも知れません｡「もし宗教を選ぶとすれば・・・」という質問には､「キリスト教」と回答する人が多いそうです。いわゆるキリスト教シンパは、私たちの周りにいるのでしょう。しかし質問３は､「あなたは現在宗教を持っていますか？」という直接的かつ個人的な質問でした。それに対して、何と3.1%の人が、自分はクリスチャンだと回答したのです。

再びですが、日本のクリスチャン人口は全人口の1%、約100万人と言われています。しかし、このアンケート結果からすると、単純計算ですが他に2%、約200万人の自覚的なクリスチャンがいるのです。すなわち、約100万人のクリスチャンが教会生活をしており、約200万人のクリスチャンが教会生活をしていないことになるのです。信じられない驚くべき数字です。しかし、私はこの数字を信用します。

私は地方教会において､過去25年間に133名の方の葬儀を司式して来ました｡そのうち55名は教会員で、48名は未信者（教会員の家族や求道者）でした。そして28%に当たる28名が他教会員でした。他教会員と言っても所属教会には行っていないクリスチャンでした。所属教会の生活から離れても、賛美と祈祷をしていた方々です。亡くなってから、故人がクリスチ

ャンであることをご存知の遺族が、「せめてお葬式はキリスト教式でお願いします」、と依頼があった方々です。
　このようなクリスチャンとしての自覚を持ちながら、現在は教会生活をしていないクリスチャンを、私たちは**「教会難民」**と呼ぶことにしたのです。難民とは、様々な理由で母国から離れてはいますが、心は母国にある人々です。同様に教会難民とは、何らかの理由で所属教会を離れていますが、心は聖書の神に在るクリスチャンなのです。
　所属教会から離れているのには、何らかの理由があったのでしょう。例えば、息子や娘家族と同居するために遠方に引っ越して、所属教会から疎遠になった場合、あるいは教会内の問題を避けて教会から離れて、教会生活を休んでいる場合です。いずれにしても、その心は教会に在り、その信仰は聖書の神に在るのです。
　そのような教会難民クリスチャンの直面する問題は、召された時の葬儀のようです。所属教会から疎遠になっていると、キリスト教葬儀を期待しても、司式者、式場、墓地など、深刻な問題に直面するのです。そんな時、地元の教会が手を差し伸べてくれたら、遺族にとって何と嬉しいことでしょう。
　教会難民と呼べるようなクリスチャンが200万人もいる事実を心に留め、近くに潜んでいる**「教会難民クリスチャン」**とその家族に、時にかなった助けの手を伸べましょう。

【ＪＭＲレポート】

　今回の JMR レポートは、「［終活]Style(Vol.2 号)」（(株)創世 ライフワークスメディア出版社、2019 年 6 月）に掲載された記事から転載させていただきました。
　また、『中外日報』のオンライン情報からも、記事を転載させていただきます。

「日本における葬儀の変化とキリスト教葬儀がもたらす可能性」
―対談― 島田裕巳（宗教学者／作家）×大和昌平（東京基督教大学教授）

映画「エンディングノート」からキリスト教葬儀を考える

司会　本日は、日本におけるキリスト教葬儀の可能性ということで、お二人の先生をお招きし、それぞれの立場でお話をお聞きできればと思っています。はじめに、クリスチャンではない島田先生にとってキリスト教葬儀は、どのようなイメージでしょうか。

島田 キリスト教葬儀と聞いて真っ先に思い浮かぶのは、『エンディングノート』（2011 年、砂田麻美監督）という映画です。監督のお父さんが病気になって、亡くなるまでの過程を描いた記録映画ですが、そのお父さんが、クリスチャンではないのに、なぜかキリスト教で葬儀をあげたいと言い出すんですね。
その理由を本人は、「キリスト教式は安い」からと言うのですが、映画を見ていて果たしてそれだけなのかなと。確かに、仏式の葬儀は高くキリスト教式だったら安いというイメージはあるのですが。この映画は、葬儀とキリスト教を結びつけて考える一つのきっかけになったと思っています。

大和　この作品は、私も興味があって大学の講義でも使っています。団塊世代のモーレツサラリーマンだったお父さんが、がんになり、自分なりの意味のある死に方をしたいということで、以前見かけたイグナチオ教会を葬儀の場に選ぶんですね。キリスト教式の結婚式は、ファッション的なこともあってか普通に定着しているのですが、葬儀はなかなかそういうわけにはいきません。私としては、「あの街の、あの会堂で葬儀をやりたい」ということで、葬儀に関してキリスト教式が広がっていったらいいな、とこの映画を観て思いました。

キリスト教葬儀は地上での最後の礼拝

島田　そもそもキリスト教式の葬儀というのは、どういう位置づけで、どういう意味内容を持っているのですか。

大和 地上での最後の礼拝です。礼拝堂に棺を置き、最後の礼拝をし、地上でのお別れをするというのが基本のキリスト教葬儀です。牧師は、故人の生き様やキリスト者としてどのよう

な信仰を持っていたかを故人が好きだった聖句から伝え、地上での最後の礼拝を共にします。その後、参列者が前に出てきて、棺の中の遺体を「お疲れさま」という思いを込めて花で飾り、その棺を賛美歌を歌って送り出す、というような内容です。

島田　プロテスタントとカトリックの違いはありますか？

大和　儀式の方法に多少違いはあると思いますが、最後の礼拝という点において変わりはありません。植村正久牧師が訳した「天に一人を増しぬ」というセラ・ストックの詩がありますが、最後に「主イエスよ 天の家庭に君と共に坐すべき席を我らすべてにも与えたまえ」とあります。このように「また会いましょう」という思いで、礼拝をするというのが基本ではないかと思っています。

司会　死者崇拝の要素が大きい仏式葬儀と、死という現実を見てキリストを見上げていくというキリスト教葬儀とでは、その違いはやはり大きいのでしょうか。

島田 違う部分と同じ部分があると思います。一般的に仏式の葬儀では読経が行われますが、お経は釈迦が説法した内容ということになります。だから、お経を唱えるということは、釈迦の説法を再現するということであって、直接死者を送ることにつながっているかというと必ずしもそうではない。そういう点では、礼拝と共通している部分があるのではないでしょうか。

コミュニティの崩壊と葬儀の変化

司会 最初に『エンディングノート』の話がありましたが、あの映画によって、今まで通りの仏式のスタイルではない１つの生き様というのが共感を呼んだように思います。そこで仏教的なスタイル、キリスト教的スタイルと言ったときに、今後、日本人の葬儀に対する考え方が変わっていくのでしょうか。

島田　歴史的に考えた方がいいと思います。日本の葬儀というのは、特に村社会の中では非常に重要で、埋葬に至るまでコミュニティの１つでした。キリスト教の話を聞くと、やはりコミュニティですよね。キリスト教徒ならキリスト教式でほとんど埋葬され、その人たちは、牧師なり神父なりと、生前から深い関係にある。まさに村社会のコミュニティです。
　今、都市の仏式葬儀では、ほとんどお坊さんとの関係はありません。大抵は葬儀社を通して、お坊さんを依頼するわけですからお寺とは全然関係ないわけです。集まってくる人も故人とは関係があるけれど、その人たち全体がコミュニティを作っているわけではありません。そこに現在の仏教式とキリスト教式の葬儀の大きな違いがあるように感じます。

大和　檀家制度に縛られたことで、オプションがなく、仏式葬儀が継承されてきたように思います。今では、都市で暮らす人のほとんどがお寺との関わりがなく、お寺で葬儀をすること自体が崩れてきています。また、高齢化が進む中では、葬式に何百万円もかけたくないということで、直葬を選ぶ人も増え、特に東京では急増しています。共同体での葬儀というものが都市では壊れ、そこに新たに直葬という葬儀の形が現れたと感じています。

島田 日本は農業中心で、確固たるコミュニティがあったから、村制度が進展し、寺請制度も浸透したと言えます。明治になると、村社会は制度としては廃止されました。しかし、慣習としての檀家制度は戦後になるまで継続されてきた。その中では、仏式で葬られることに疑問はなかったわけです。葬儀後も、何年にも渡って法事などがあってお寺との関係が続き、お寺を介してのコミュニティが生きていたんですね。ところが、戦後、都市化が進み、そういったコミュニティは崩れてしまった。地方でも、葬儀は今ほとんど葬祭会館でやっていて、葬式というイベントになってしまいました。そういう意味では、共同体としての葬儀の意義は薄れて、参列者の多い一般葬は減り、簡略化が進んでいくというのが現状ではないでしょうか。

司会 実際、近年では直葬の葬儀がかなり増えていて、関東では３０％くらいです。コミュニティが崩壊する中、今後は、家族葬も縮小し、直葬というのが増えそうな気がします。

弔いのない社会に残る大きな不安

島田　現代は、人が死んだという事実自体も共有されなくなっています。ＮＨＫの大河ドラマでも、重要な人物の死をナレーションだけで伝え、実際死ぬ場面はやらないことが話題になっていました。現実でも、死んでも葬儀をやらない、身内だけですませるという葬儀が多

いわけですから、故人を知る人たちに死んだことが伝わって来ない。死という出来事、葬儀という出来事が、完全にその家や故人の周辺のプライベートな出来事になって、付近の人たちには関係のない出来事になってきているように強く感じます。

大和　東日本大震災で、津波に流されてしまった遺族のために、牧師が海に向かって思わず十字を切ったそうです。プロテスタントが十字を切ることは普通しないのですが、その行為だけでも遺族は非常に慰められたそうです。
　人が死ぬということの重さを考えると、ある意味、大仰な儀式をして別れないことには残された人は先に進んでいけない。ですから、「弔う」ということは、宗教に関係なく必要なことであって、それをしなくなった社会というのは、深いところに不安が残っていくのではないかと考えています。共同体が崩れていく中で、葬儀が形骸化し、きちんとした別れをしないことの怖さのようなものを感じるのですが。

再会の希望が慰めを与えるキリスト教葬儀

島田　やはり問題は、残された家族の心の整理がつかないうちに葬儀が行われることだと思います。東日本大震災では、予期しないことですから遺族にはダメージが大きかったはずです。その場合、宗教的な葬儀によって、遺族の心を癒せるのかが問題で、キリスト教葬儀の可能性を考える上で一番大きなポイントではないでしょうか。

大和　キリスト教の葬儀というのは、命の創造者の元に帰るという安心感なんですね。死を超えた安心感、それが私たちキリスト者の信仰です。葬儀にクリスチャンでない人がいらした時も、そういった安心感を得るというのをよく聞きます。
「クリスチャンは、祈りばかりしていて弱そうに見えるけれど、人が崩れそうな時に崩れないんですね。こんな死に方があるんですね」といったことも耳にします。また、初めてキリスト教に触れた人から、「こんな素敵なお葬式があるんですね」と言われたこともあります。

島田　どういうところで感じるのでしょうか。

大和　聖書の最後の約束で、体をもって復活することが書かれています。そこには再び会える希望とともに、もっと大きな人生が先に用意されているという希望があります。そういったことが、葬儀の時にも表れてくるのではないかなと思います。地上での和解とともに再び会えるという信仰、希望ですね。それが遺族や参列者に慰めを与えるのではないかという思いはあります。

島田　そこで思い出したことがあります。私が宗教学の師と仰ぐ岸本英夫先生です。元々はクリスチャンだったのですが、途中で信仰を捨てたんですね。1954 年にアメリカのスタンフォード大学に客員教授として招聘されていた時に、頭部に悪性の腫瘍が見つかり定年前に亡くなりました。先生は、クリスチャンでない自分がどうやって死と向きあっていけばいいのか、ずっと考え続けていました。
先生の『死を見つめる心』（講談社）という本を通して、一人の宗教学者の生き様のようなものを学びました。死には、本人にとっての死、家族にとっての死というものがあると思います。がんなどにかかって死に直面し、死んでいく時に、クリスチャンのように死を考えることができるかが、今考えるべき重要なことではないでしょうか。

教会を魂や命の問題に向き合える場所に

司会　日本社会で葬儀が簡略化し、直葬というものが増えていく中で、キリスト教がコミュニティを発信していくことは可能でしょうか。

島田　コミュニティという要素と、本人の死の覚悟というところが重要かなと思います。ポール・シュレイダー監督の『魂のゆくえ』という映画があるのですが、ニューヨークの小さな教会の牧師が主人公です。興味深いのは、アメリカだと主人公が牧師で、死に直面する映画が作れるわけです。日本だとお坊さんが自分の死に直面して、魂のゆくえを考える映画はできないように思うんですね。そこにキリスト教と日本の仏教の大きな違いがあるかなと。

司会　キリスト教の方が、死について問い掛けやすい場所なのかもしれないですね。

大和　東京基督教大学の葬儀研究会では、共同体が壊れていく時代に、教会は人口の１％のクリスチャンの葬儀をやるだけではなく、もっと地域の中に入って、孤独死を出さないようにいろいろな人と接点を作っていくことが課題となっています。これは、葬儀以前の問題で

す。地域の中で困難を抱えている人たちにとって、教会が魂や命の問題に向き合える場所であれば、『エンディングノート』のお父さんのようにキリスト教葬儀で送ってほしいと思う人が起こされるのではないかと考えているところです。

司会 お二人の話を聞いて、人間関係が希薄化する日本社会において、キリスト教が、死をキーワードにどんどん地域社会に関わっていくことが求められている時代に突入していると感じるのですが。

島田 今、高齢で亡くなる人と、若くして亡くなる人が二分する形になっている中で、後者が病気などで死に直面した時に、どう死を受け入れていくかというところに宗教の本質みたいなものがあります。ただ、それはどの宗教においても、そういう力を持ち得ているとは限らない。仏教の葬儀では、僧侶が葬儀の中で一番高いところにいて、今の感覚からするとすごく矛盾している。そういう仏式葬儀というものが、突然死に直面した人にとって意味のあるものになりうるかというと結構難しい。だから、そこは仏教がキリスト教から学ばなければならない点かもしれません。

司会 牧師は、どちらかというと、亡くなった家族に仕えるという立場にありますから、こういったところも、牧師を主人公に映画を作ったほうがドラマチックになるのかもしれません。対談の中で、今後必要になることや、実践したいと思うことはあったでしょうか。

大和　島田先生とお話しして気付かされたことは、キリスト教会は自分たちの共同体の中だけで生きていて、それでは葬儀ということを考えたとき限界があるということです。まずは、いろいろな人が集まれる場所、行き場のない人が来ても大丈夫な場所であることが、教会が地域に仕えるといった時に大事ではないか。人を丁重に葬ることは、キリスト者でなくてもできることです。そのことを知ったうえで、地域の中で私たちが深く関わって、本当に仕えていく中で新たな出会いが広がっていったらいいな、ということを改めて思わされました。
ただ、それはどの宗教においても、そういう力を持ち得ているとは限らない。仏教の葬儀では、僧侶が葬儀の中で一番高いところにいて、今の感覚からするとすごく矛盾している。そういう仏教式な葬儀というものが、突然死に直面した人にとって意味のあるものになりうるかというと結構難しい。だから、そこは仏教がキリスト教から学ばなければならない点かもしれません。

司会　今回は、あえてクリスチャンではない島田先生をお招きしてお話を伺いました。宗教学者としていろいろな宗教を研究している立場から、今回の対談も含めて、終活とか、葬儀とかを外から見て、教会やクリスチャンに「こうしたらいいのではないか」というような応援メッセージをお願いします。

島田 昭和天皇が亡くなったときに、カトリック中央協議会が「天皇が天に召された」という文章を出しました。その時に、キリスト教からみれば、天皇であろうと、一般の信徒同様に、神によって天に召されたという考え方をすることに衝撃を受け、ある意味、そういう姿勢でいいのかなと思っています。ですから、信者・未信者と分けずに、宣教布教活動の一環として、あえて未信者の葬儀を引き受ける試みがあってもいいのではないでしょうか。それがコミュニティの中で、一人で死に直面して死んでいく人の慰めへと通じていくし、それは仏教以上にキリスト教の方がやりやすいような気がします。

司会：「終活 STYLE」編集長　野田和裕
ライター：坂本直子
＊「終活 STYLE」第 2 号より転載

中外日報の新聞記事から【2019 年 6 月～2019 年 9 月】

無住・兼務寺問題　過疎地寺院の再構築へ

2019 年 6 月 28 日社説

伝統仏教の諸教団で、無住・兼務が多い過疎地の寺院対策に本腰を入れて取り組む機運が高まってきた。本紙 2018 年 5 月 16 日付 1 面は「『座して死』は避けたい」という刺激的な

見出しを掲げ、曹洞宗議会での過疎対策に関する議論を紹介している。最近の記事でも、「今後想定される寺院減少が宗費や宗団運営に影響（天台宗）」「天台宗無兼住寺院対策小委が宗教法人解散時の助成制度創設へ動く」などが見当たる。

無住・兼務の過疎地寺院問題を、伝統仏教が長らく無視してきたわけではない。しかし、限界集落や「寺院消滅」が流行語になり、檀信徒の離郷や墓じまいが寺院の護持基盤を深刻に脅かす状況に危機感を深めた各教団は、効果的な具体策を模索し始めた。

無住・兼務対策に積極的な教団の一つに臨済宗妙心寺派がある。07 年には同派寺院の 28％に当たる 948 カ寺の兼務・無住寺院を悉皆調査し、各寺院の伽藍、境内地、墓地、檀信徒や役員、法務の内容、年収、後継正住職就任の予定などをまとめて、翌年、同派の無住寺院対策委員会に報告している。調査対象の 7 割が年収 100 万円以下で、3 割が無檀家という結果は、ある程度予測されていたとはいえ明確な数字で示されるとショックを与えた。

前記委員会で比較的早くから議論を重ねてきたため、この時点ですでに 66 カ寺が合併吸収を予定していた。その後、同派の春・秋の宗議会では毎回のように被包括宗教法人の合併や解散の報告が行われてきた。09 年に同派宗務総長となった松井宗益氏は就任に際し「安易な合併・解散は考えない」と述べた。一方で、「明日の宗門を考える会」を立ち上げ、兼務寺院対策を検討課題に掲げた。兼務寺院を単なるネガティブな処理案件ではなく、宗門の未来像に直接結び付けて検討する姿勢だ。

「安易な合併・解散は考えない」は全ての宗門指導者が共有する思いだろう。行政側が強調する宗教法人格の悪用防止という「大義」は、被包括関係を持つ過疎地寺院でどれほどの実例があるか疑わしく、解散は手間も費用もかかる。「廃寺」の 2 文字を連想し、先師の事績を否定するように響く。

とはいえ、財産も信者もいない寺が法人格を持つ意味はない。不活動状態の被包括法人の実態が、法人売買と結び付けて論じられるのも誤解を生み、宗教法人制度そのものの信頼を傷つける。

無住や兼務の寺院問題を宗門の将来ビジョンの中に明確に位置付け、解散・合併も含めて正面から取り組むべき時期に来ている。

放浪者とよそ者　意識されない価値観の理解

2019 年 7 月 3 日　社説

宗教社会学者ジンメルは、マックス・ウェーバーも高く評価し、ハイデルベルク大教授に推薦したが、就任できなかった。それは彼がユダヤ人であったためだとされている。そうした経験の故か、ジンメルは人々の心の底に潜む見えざるフレームのようなものを深く分析し、社会関係の形式という視点を提起した。上下関係、分業など、全ての社会関係に見いだされる形式が指摘されている。

その中でとりわけ興味深いのが「放浪者」と「よそ者」に関する議論である。放浪者とは「今日訪れ来て明日去り行く者」であり、よそ者とは「今日訪れて明日もとどまる者」である。分かりやすい例を挙げれば、観光客は放浪者で、近隣に住むようになった外国人はよそ者である。さらにジンメルは「よそ者」を貧者、内部の敵と一括りに論じている。

注目したいのは、一般に人々は「放浪者」には優しいが「よそ者」には厳しいという点だ。このジンメルの指摘は実に的確である。現代日本でもそうした傾向をあちこちで見いだすことができる。

オリンピックに向けて「おもてなし」の心が盛んに強調される。オリンピックの際にやって来る人たちは、ジンメルの区分を適用すれば「放浪者」である。こういう人たちにはおおむね優しい。他方、日本に居住する多くの外国人へのまなざしは、必ずしも温かくない。時には近隣の国から来た居住者に対し、「国へ帰れ」などと激しいヘイトスピーチを浴びせることさえある。

この残念な現象は、むろん日本だけの話ではなく、世界のほとんどの国で見いだせるに違いない。ジンメルは社会というものが持つ、そうした特性に冷徹な分析を加えたと見なせるのである。

そうしたことを踏まえ、具体的に何をすべきか。宗教界の多くは総論として平和を願い、争いが起きないことを目指している。だが各論になると、「よそ者」への厳しい態度もなくはない。日本に住む以上、日本の宗教や文化に従ってほしいというような主張は、受け取る側からすると、排斥されていると感じられる場合もある。

食べ物や服装の多様性の受け入れに比べて、宗教的価値観の多様性を受け入れることは、格段に困難さが増す。特に当人が、宗教に基づく戒律ではなく、日常的な習慣と思っていることの方が厄介である。それ故、多様な宗教文化についての学びの課題はそれぞれの戒律の違いといったことから、さほど意識されていない価値観の違いに、もっと目を向けていく段階になっている。

「黒い羊」は求めない　自分の頭で考える社会

2019 年 7 月 5 日　社説

集団の一部構成員の評価を貶めたり嫌悪感を集中させたりして排除し、集団全体の一体感を高めることを心理学で「黒い羊」効果と呼ぶ。情報化の現代はマスコミやネットで攻撃の対象を渉猟することが日常茶飯で社会現象化した印象さえあるが、その心理は「黒い羊」探しと似通っているようである。

攻撃対象も「生活保護」や「在日」「LGBT」「沖縄」のほか「負」の日本史にきちんと向き合う歴史観など旧来のものはもとより、近年は弱者や少数派を擁護する人々や政権批判するリベラルな言説にまで広がり、様相は相当複雑だ。少しそれるが、有名人の言動をとがめる「不謹慎狩り」もますます熱を帯びている感がある。

先日の川崎市の児童ら殺傷事件で「引きこもり」を犯罪と結び付ける誤解が生じたように、多くの場合、攻撃側は事実関係に無頓着で、付和雷同的に時の風潮に同調する点が共通する。深く考えることのない情動的な思考が一気に拡散する土壌が、この社会によどんでいる。そこに不気味さがある。

とげとげしい世相を考える上で、昨今、なぜ忖度とハラスメントが重なって問題化したのかを説く論考が参考になる。

巷間語られる忖度は相手へのおもねりだが、その本質は日本的なムラ社会で培われた「村八分」を恐れる集団内の自発的な従属意識だ。ハラスメントも、本当は行為を受けた側が苦痛と感じたかどうかによるが、同調圧力の強いムラ社会的人間関係の中で、その苦痛が顕在化しにくかった。「個の自立」といわれるように、ようやく集団内の理不尽に気付き、それがパワハラやセクハラだという認識も高まって伝統的な精神風土に異議の申し立てが始まったのは、まだ最近のことに属する。

その場合、長く集団の論理に生きた人々は自立した個人の動きに「秩序を乱す」と倒錯した反応を示しがちだ。日常的に抱く自己の無力感や苛立ちの裏返しだろうが、それが非寛容につながっていく。「黒い羊」探しの社会現象化の一端がこれでうなずけるが、大事なことは、集団への同調ではなく、**自分の頭で考える習慣**だ。

戦後日本は最短距離で経済成長を遂げた。アスファルトで固めた高速道路がそれを象徴するが、時には効率を忘れ、脇道に入るゆとりがないと人は生きる意味を失う。でも、脇道では自分の頭で考えないと迷ってしまうだろう。

宗教が安らぎを追求するものである限り、無関係な話ではない。脇道でたたずんでいる人々こそ信仰を求めているはずだから。

教団・教派、宣教団体の機関紙・ニュースから

カトリック中央協議会　諸文書：教皇文書

教皇フランシスコ、2019年5月26日「アレルヤの祈り」でのことば

2019/08/19

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、こんにちは。

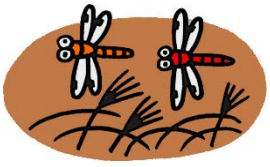
復活節第六主日の福音朗読では、イエスが最後の晩餐で使徒たちに語ったことばが読まれます（ヨハネ14:23-29参照）。イエスは聖霊の働きについて語り、約束します。「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」（26節）。十字架のときが迫る中で、イエスはこう言って弟子たちを安心させます。彼らは独りになるのではなく、弁護者である聖霊がつねに寄り添い、世界中に福音を伝えるという使命を果たすのを助けてくれます。ギリシャ語原文では、「弁護者」ということばは、そばにいて支え、いやしてくれる存在を意味します。イエスは御父のもとに戻りますが、聖霊の働きを通して弟子たちを教え導き続けます。

たまものとして与えるとイエスが約束してくださった聖霊の働きとは、どのようなものでしょうか。イエスはこのように説明しています。「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」（26節）。イエスはすでに、使徒たちに託したいと思っていたものをすべて、地上での生活を通して伝えていました。神の啓示、すなわち、御父が御子の受肉によって人類に伝えたいと望まれたことのすべてを、イエスは成し遂げました。聖霊の働きとは、イエスの教えを伝え、完全に理解できるよう教え、実践するよう導くことです。それはまさに教会の使命でもあります。教会はいくつかの必要不可欠なことがらによって特徴づけられる生き方を通して、その使命を果たします。それらは、主を信じ、みことばに従うこと、今も生きておられる復活した主のために働き続けておられる聖霊に従うこと、主の平和を受け入れること、そして他者を受け入れ、他者に出会う姿勢を通してあかしすることです。

これらすべてを成し遂げるためには、教会はじっとしているのではなく、すべてを新たにしてくださる聖霊の光と力によって活気づけられ、支えられながら、旅を続ける共同体として働かなければなりません。洗礼を受けた人がそれぞれ積極的にかかわるのです。つまり、しばしば信仰の旅の足かせとなる自分の考え方、企て、目的といった世俗的なしがらみから自分自身を解放し、主のことばに従順に耳を傾けるのです。神の霊は、教会の明るく美しい真の顔が、キリストが望まれた通りにさらに輝くように、わたしたちを導き、教会を導いてくださいます。

今日、主は聖霊のたまものに心を開くようわたしたちを招いておられます。それは、主が歴史の道でわたしたちを導けるようにするためです。主は「すべてのことを教え」、「主が話したことをことごとく思い起こさせる」ことにより、福音の論理、受け入れる愛の論理を日々、わたしたちに教えてくださいます。

わたしたちがとりわけこの5月に、天の母として崇敬し、祈りをささげているマリアが、教会と全人類をつねに守ってくださいますように。勇気にあふれる謙遜な信仰をもって、御子が人となられるために聖霊に完全に協力したマリアの助けにより、わたしたちも、みことばを受け入れ、実生活であかしするために、弁護者である聖霊の教えと導きに身をゆだねることができますように。



日本基督教団「教団新報」

【4903号】教団伝道推進基本方針

2019/06/01

「イエスは、近寄って来て言われた。『わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。』」
（マタイによる福音書28章18～20節）

１．祈祷運動　−共に祈ろう−
主の伝道命令に従い、500年を経た宗教改革の信仰を受け継ぎ、罪の悔い改めと救いの感謝の祈りをささげるために「日本伝道の推進を祈る日」（毎月第3主日）を設けて共に祈りを合わせる。

２．信徒運動　−共に伝えよう−
礼拝において聖霊の力を受け、聖書を読み、熱心に祈り、喜びをもって主の恵みを証しし、キリストの十字架による罪のゆるしの福音を宣べ伝える信徒として共に成長することを目指す。

３．献金運動　−共に献げよう−
日本の各地にあって、日夜伝道のために苦闘している教会・伝道所を具体的に覚えて祈り、その働きを支えるために共に献げることによって、信徒および教師における献身の志が高められ、献身者を生み出す教会となるように献金運動を展開する。

2017年7月11日　40総会期第2回常議員会　制定
2019年4月15日　41総会期第3回常議員会　改訂

【4905・06号】♦伝道推進基本方針実践報告♦

2019/06/29

「信徒が伝道する教会」をテーマに

東京教区・深沢教会牧師　齋藤　篤

わたしが深沢教会に赴任して3か月目に「イエス様への信仰を告白されましたので、バプテスマの準備をよろしくお願いします」と、ある教会員から言われた。わたしは一瞬何のことかと戸惑ったが、すぐにわかったのは、その会員が礼拝に出席し始めた青年に礼拝後少しの時間を用いて、自分の救いの体験を通して、主と共に生きる喜びを伝え続けていたということだった。

その青年は、わたしとの準備を経てバプテスマを受けるに至った。このパターンが、わたしたちの教会における「日常」であったことを知ったとき、とても新鮮な気持ちにさせられた。

この経験を通して、わたしは伝道をする「器」について考えさせられた。牧師が専ら伝道に励むために神から遣わされていることは当然でありながらも、牧師「だけ」が伝道の担い手ではないことを、深沢教会の信徒伝道の実際から改めて確信させられたのだ。

わたしが現在遣わされている深沢教会は、約50年前から「信徒が伝道する教会」というテーマを掲げ、決して牧師まかせにしない伝道のスピリットを現在でもなお保ち続けている。信徒と牧師が主にある深い信頼関係のうちに連携しながら、主イエスの宣教命令に応えたいという思いを、あらゆる機会を通じて互いに確認している。

信徒が「伝道したくなる思い」を応援することが牧師の重要な務めであるし、牧師にとっても、信徒のそのような祈りと支えが最高の励みとなることを確認する。この連鎖が結果として、「伝道は楽しくてしょうがない！」と何のてらいもなく断言できる教会の歩みへと導かれているのだと実感している。

最近、教会のウェブサイトを見た他教会の方々が、深沢教会を見学し、礼拝の喜びを共に味わう数々の機会をもらっている。文字だけでは伝えきれない喜びを皆さんと共有したいと願っている。それが教団における伝道推進のための、わたしたちの教会ができる一助であると信じて止まない。

深沢教会ウェブサイト（http://www.fukasawa-c.com/）

日本聖公会【日本聖公会 管区事務所だより（2019 年 6 月 25 日　第 344 号）】

《主教会メッセージ》

日本聖公会宣教160周年を迎えて

日本聖公会につらなるすべての皆さまに主の平和がありますようお祈りいたします。日本聖公会は2009年に宣教150周年を迎え、多くの皆さまと共に記念礼拝を献げ、これまでに与えられた大きな恵みを主に感謝し、宣教への思いを新たにいたしました。それから10 年が経過し、今年は日本聖公会宣教160周年となります。

この10年を振り返ってみますと、2011年 3月11日に東日本大震災が起こり、津波や東京電力福島第一原子力発電所事故により、多くの方々が犠牲となりまた避難を余儀なくされ、9年目を迎えた今もなお困難な状況におかれています。その後も熊本地震、九州北部豪雨、西日本豪雨、北海道胆振東部地震など各地で自然災害が相次ぎました。東日本大震災では被災者支援活動として「いっしょに歩こう　プロジェクト」が全国また全世界の皆さんの祈りと協力によって始められ、その活動を通して様々な気づきが与えられました。また福島第一原子力発電所事故と周辺地域の放射能汚染は、わたしたちのライフスタイルそのものが問われる出来事でした。そして未来に大きな負債を残す出来事になってしまいました。

こうした体験を踏まえつつ、2012年には「いのち、尊厳限りないもの」をテーマに日本聖公会宣教協議会が開催され、「日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言」が出されました。信徒の高齢化、信徒数の減少、教役者不足、財政の逼迫など、さまざまな課題を抱えながらも、信徒、教役者が主体的に丁寧な宣教・牧会を心掛けることを決めました。また2012年に開催された第59（定期)総会では「日本聖公会ハラスメント防止宣言」が可決され、その後ハラスメン ト防止・対策担当者も置かれ、各教区の担当者と連携しつつ、研修会などに取り組んでいます。そこに集う誰もがその尊厳を尊ばれる共同体となることは教会にとって大切な課題です。翌年には第２回世界聖公会平和協議会が沖縄で開催され、沖縄の人びとや朝鮮半島の統一のために働く人々の声に耳を傾け、世界の聖公会が正義と恒久平和の働きに連帯することを呼びかけました。

2014年には日韓宣教協働30周年記念大会が韓国済州島で開催され、日韓両聖公会が東アジアの平和のために、宣教協働を継続していくことが確認され、青年や女性たちの交流などが行われています。また大韓聖公会から宣教協働者として日本聖公会で働く司祭たちのなかから、任期終了後も教区籍を移して各教区で働く方がおられることは感謝です。2016年に開催された第62（定期)総会では、「ハンセン病回復者と家族のみなさまへの謝罪声明」が決議され、国の隔離政策を黙認・支持したことによって人間としての尊厳を奪われた皆さまに謝罪し、今もなお続く偏見・差別をなくす啓発活動、また高齢化が進む療養所内教会の信徒への牧会、また交流を大切にすることを約束しました。またこの総会では祈祷書改正委員会設置が承認され、これからの時代にふさわしい祈祷書を編纂・発行するために作業が続けられており、これからの礼拝の充実が期待されます。

2018年に開催された第64（定期）総会では、「日本聖公会祈祷書によって聖職按手を受領した者の聖職位は有効性を保持していることを認識する」ことを原則とする「女性の司祭按手に関するガイドライン」が可決されました。日本聖公会で最初の女性の司祭按手が行われてから20年を迎えた昨年12月には女性の司祭按手20周年感謝礼拝が行われましたが、性の違いを超えた協働がますます期待されます。全国青年大会、日韓青年セミナー、Ｕ２６など青年たちの活動は継続され、教区、管区を超えた豊かな出会いと気づきが与えられています。 同時にこの10年間で聖職者数や信徒数はさらに減少しています。特に聖職者数の減少は深刻であり、今後の各教区の在り方にも関わる課題です。こうした現状を踏まえ主教会では2022年に開催予定の日本聖公会宣教協議会に向けて、神学教育担当者養成の課題をも含め　日本聖公会の宣教体制の見直しを検討し始めています。これまで度々議論されながらも維持されてきた現在の11教区制について、より積極的な意味での宣教体制の立て直しとして、その統合・再編成の議論を推し進めることも主教会に託された課題であると考えています。

日本の社会では高齢化が進み、経済格差がさらに広がり、ナショナリズム的傾向が強まり、少数者の人権侵害が深刻になっています。また沖縄の米軍基地を固定化させ、戦争放棄を謳っ

た憲法9条の改定など日本の再軍事化を加速しようとする動きも顕著です。また絶えることのない痛みと分裂を体験する世界のなかで、わたしたちが果たすべき使命を再確認したいと思います。

日本聖公会宣教150周年記念主教会教書では「礼拝が『レイトゥルギア』（人々の業）と言われるように、教会は何よりも『神の民』の共同体です。キリストの福音と愛を伝える器として召されたわたしたちは、どこにあっても、教会の礼拝に集められ、み言葉と聖餐によって養われ、この社会に派遣されていきます。信徒の働きと参加は聖職の働きと同様に大切であり、教会は自分自身のためだけではなく、特に社会の中で小さくされている人々の中に神様の臨在と働きを見出し、奉仕する使命を持っています。これらの働きは聖公会のみならず、教派を超えた教会間の対話と宣教協力によってなされるものでもあります。」とあります。

また2012年に開催された日本聖公会宣教協議会の「日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言」では、「日本聖公会が新しい共同体となるために、わたしたちは過去の歩みを謙虚に省み、神への信頼と希望をもって歩みだします。キリストの救いと喜びをこの世に現すため、またサクラメントをとおして与えられる神の恵みに多くの人びとを招くために、み言葉と礼拝への思いを深め、ともに祈ります。教会は、特に癒しと解放を求める人びとに心を通わせ、一人ひとりの＜いのち＞を宝とし、地域（パリッシュ）そしてすべての被造物とともに主の救いに与ることを願います。」とあります。

主から託された和解と平和の使命を果たす思いを新たにしたいものです。ユダヤ人を恐れて家の中に閉じこもっていた使徒たちは、聖霊を受けた後この世へと送り出され、大胆に福音を語り始めました。日本聖公会に連なるわたしたちは、使徒たちに注がれたのと同じ聖霊に満たされ、慈しみと憐れみの神に信頼し、それぞれの場にあって主から託された使命を果たしてまいりましょう。

2019年6月9日　聖霊降臨日

日 本 聖 公 会 主 教 会

日本聖公会【日本聖公会 管区事務所だより（2019 年 7 月 25 日　第 345 号）】

「エキュメニカルつながりの中で」

管区事務所総主事 司祭 エッサイ 矢萩新一

先日、2018年の NCC（日本キリスト教協議会）創立70周年を記念する「NCC 主催・宣教会議」が開催されました。NCC は、WCC（世界教会協議会）や CCA（アジアキリスト教協議会）ともつながりつつ、日本の多くのキリスト教会が、かつての侵略戦争に協力した歴史を省みながら、いのちの痛みに寄り添うエキュメニカルな共同体として、約30の教派や教団体が手をつなぎ活動しています。NCC は、創立50周年にあたる1998年と敗戦後60年にあたる2005 年とに、過去2回の宣教会議を開催し、社会の様々な矛盾の中で発せられる「命の痛み」に共感し、寄り添っていくことこそが、イエスの示された宣教の原点であることを確認しています。今回の宣教会議開催にあたって、2016年から4回にわたる「プレ集会」を開催しながら、＜み言葉＝ケリュグマ＞－み言葉に聴き、伝えること、＜奉仕＝ディアコニア＞－世界、社会の必要に応え仕えること、＜証し＝マルトゥリア＞－生活の中で福音を具体的に証しすること、＜祈り・礼拝＝レイトゥルギア＞－祈り・礼拝すること、というテーマを紡ぎ、教会の豊かな働きが、＜交わり＝コイノニア＞－主にある交わり、共同体となるために、各委員会や部の活動を通して大切にしたい NCC の働きが宣教宣言としてまとめられています。

「私たちの宣教・伝道とは、聖霊の助けと導きを信じ、…見失ってはならないオイクメネーの「地の果て」からの＜いのちの叫び＞　に丁寧に聴き、そこで私たちを待っておられるイエス・キリストを目指し、そこに遣わされることにあります。…互いにつながれて、「神の宣教」のために働く「主にある交わり、共同体」となることを、ここに宣言します。社会派か福音派か、という二元論に陥ることなく、人間の生のすべての領域に関わる喜びと解放の課題について共働していくエキュメニカル運動でありたいと願います。マイノリティを孤立させず、多文化共生社会の実現を目指すことが、エキュメニカル運動の課題です。…女性は宣教の客体では

なく「主体」であることを確認し…私たちの「コイノニア」は…あらゆる世代、ジェンダー、セクシュアリティに属する人々が「主体」でなければなりません。日本におけるキリスト者はその人口の1%以下ですが、聖霊に押し出され、自己保存的な志向から解放されて、常に開かれた共同体、より包括的な共同体でありたいと願います。…少数者であるからこそ、日本にはエキュメニカル運動が必要であること…限界ある不完全な私たちであることを自覚するからこそ、私たちは「塩で味つけられた言葉」をもって、他者の連帯と共働を喜ぶのです（NCC 宣教宣言2019より）」。アーメン。

また、宣言文を内在化させるためのリタニー「共働を願い、聖霊を求める祈り」も同時に採択されました。宣言文全文は NCC のホームページに掲載されていますので、ぜひご覧くださり、各地域でのエキュメニカルな交わりの中でご活用ください。

「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全に現れるのだ」
（Ⅱコリント12:9、聖書協会共同訳）

日本バプテスト連盟「バプテスト NO.766」（2019.5）

全国各地からのレポート

「この時代のなかで、私たち教会は」

【2・11 集会「神を愛し、人を愛す～天皇制と日米安保～」2 月 9 日・浦和教会 】

「神を愛し、人を愛す～天皇制と日米安保～」をテーマに、 靖国神社問題、日韓・在日連帯、ホームレス支援の各特別問題委員会と女性連合から発題していただき、平和宣言推進担当者会・谷本仰委員長の進行でパネルディスカッションが進められました。発題者それぞれが取り組まれている活動の視点を通して今回のテーマが私たちにとってどう関係しているかを考える集会となったと思います。また特別委員会の働きや課題などを知ることもできました。

これまで教会は「天皇制」と「日米安保」、この 2 つのことについて話をすることを避けてきたように思います。そこには教会が政治に関わることについてのさまざまな意見や思いもあるかと思います。しかし今回の集会で、「平和宣言」の第１戒である「あなたはわたしのほかに、なにものを神としてはならない」についてどれほど真剣に向き合ってきたかを問われたように思います。神を神とすることは社会の中にある隣人の痛みを知り共に担っていくことを各発題から教えられます。

そして今、そこにおられる人々の痛みに無関心であったことに気づかされました。私たちが生きているこの社会の中で隣人の痛みを知り、何ができるかを共に考えていくことが神を愛することなのだと教えられます。参加者一人ひとりが課題を与えられた集会だったと思います。この時代のなかで、私たち教会は内側だけでなく社会で何が起こり問題になっているかを知り、目を向けていく必要があります。今回の企画をされた憲法アクション・平和宣言の両委員会ほか、この集会に携わった多くの方々に感謝いたします。

【参加 29 教会他派等 74 名】（北関東地方連合社会委員会、太田キリスト教会牧師・林健一）

「アイデアを形にしよう」

【東京地方連合「第 2 回協力伝道会議」2 月 16 日・新小岩バプテスト教会】

協力伝道会議を 2 回開催としたのは、このテーマが打ち上げ花火のようにスポット（単発）で話し合うものではなく、教会 1 つひとつ、教会員一人ひとりが、継続的に考え、話し合い続けることで豊かにされていく事柄だと理解したからです。

今回の会議は、川口義雄牧師（新小岩）による「宣教とは」のメッセージで連盟草創期の教会（目白）と教会（新小岩）のつながりを通して協力伝道の実りの豊かさを改めて教えられることから始まりました。

吉高叶常務理事の発題では、教会や牧師の経済事情まで織り交ぜてパラダイムシフトを求められている私たちの現状を共有しました。また、内藤崇連合会長が「協力伝道の焦点」を第1回協力伝道会議で体感し見つけたアイデアの種に、連合役員会などでのやり取りを通して与えられた気づきなどを加えて発題。その後、発題された「教会が新枠組みの連合に加盟し、その連合が法人業務に機能特化した新連盟に加盟する」「信徒会の枠組みを変える」 ことなどについて分団で意見を出し合い、気づきを分かち合いました。午後の研修会では講師の大西晴樹氏（恵泉・明治学院大学教授）より、「私たちは何故バプテストなのか」をバプテスト史をひもときながら、そもそもから考える貴重な機会をいただき、閉会しました。

アイデアを出して後はよろしくとただ待つのでは、協力伝道に対して主体性を持ち始めた種火が消えてしまうのではないか、それは「もったいない」と考え、引き続き、協力伝道の恵みと課題を教会一つひとつ、教会員1人ひとりが知り、連盟のパラダイムシフトへ関与し、主体的にされていくため、連盟総会への教会提案をサポートしていくことができないか考え始めています。

【参加：27 教会 85 名】（東京地方連合会長、目白ケ丘教会会員・内藤崇）

「大丈夫、こっからたい！」

福岡地方連合・協力伝道会議「どげんすっと？宣教協力」2 月 23 日・西南学院教会

「福岡連合は行事が多すぎる」という声は長年、連合内外から出ていました。実際、連合だけで年間で 70 近い集会があり、加えて西南学院大学神学部、九州バプテスト神学校、久山療育園、各団体の集会が入ると週に 2～3 の行事は当たり前状態。「さすがにこれは…」とここ 2 年、連合では役割の整理に勤しんできましたが、これと合わさったのが今回の協力伝道会議です。諸教会、連合、連盟、課題はさまざまだけど、どこかつながっているし、何より全部をひっくるめて私たちのこと。そんな現実を見ながら「どげんすっと？」と膝をつき合わせたのがこの集会でした。

始めに 4 名の方々からの発題。吉高常務理事からは連盟の現状とこれからの課題を、踊真一郎牧師からは「創造的な働きをするには創造的なゆとりが必要」と、吉田晃児牧師からは 「パラダイムシフトは“上から下へ”目線でなく互いの歴史を大事に」と、溝上哲朗牧師からは筑後地区 3 教会の 11 年に及ぶ協力関係の具体的な事例が紹介されました。分団での意見交換は白熱しました。「少子高齢化」「財政難」「新しい人が定着しない」「伝統・慣習を変えられない」といった訴えも多い一方、「先ず御言葉」「柔軟性」「信徒力」「教育」「地域との出会い」といった大事なキーワードも見えつつあります。具体的に取り組み始めた教会があることで元気も湧いています。

分析や取り組みはこれからです。でも「どげんすっと？」との問いは「大丈夫。うちらバプテスト、こっからたい」との期待に変わりました。何かが動き始めました。ワクワクしています。【参加 31 教会・131 名】

（福岡地方連合副会長、久留米キリスト教会牧師・踊真一郎）

日本同盟基督教団「世の光 NO.825」（2019.6）

理事の声「宣教協力」

教育局担当理事　丸山園子

「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」

（マタイ28章18－20節）

主イエスの宣教命令は、弟子とすること。それは、人々に福音を宣べ伝え、洗礼に導くだけにとどまりません。主イエスがなさったこと、主イエスが語られたことを知らせ、主イエスに

倣うように教えることが重要です。日本同盟基督教団の三本柱の一つ「宣教協力」にも、育成・教育という視点が含まれていることを忘れてはなりません。教育という面でも協力していきましょう。

第65回教団総会において「明日の伝道者は全教会で育てる」という理念が共有され、「明日の伝承者育成負担金」が始まりました。機構改革で、三本柱・三原則を再確認する中で決議されたことでした。「献身者デー献金」は、それ以前から行われていました。教師候補者（以前は認定神学生）と留学教師の奨学金として用いられています。補教師研修会も継続されています。これまでも全教会挙げて、教職者養成に取り組んできました。宣教協力は、教職育成だけではありません。

教会教育部は、各教会で用いるために受洗用・受洗後用テキストを9種類提供しています。キッズ・ユース用のものは、高齢者にも用いることができます。今後、教会教育の全体像を構築すること、教会学校のリソース提供を行っていく予定です。

家庭教育部も、「家庭」という宣教の実践領域を励ます取り組みをしています。クリスチャンホームを築いてほしいという願いから始まっている教団挙げての「クリスチャンホームビジョン」。今年から、インターネット登録できるようになりました。

日本同盟基督教団の教職者執筆の家庭礼拝ガイドは、クリスチャンホームの家庭礼拝だけでなく、初心者や高齢者のためのディボーションテキストとして用いられています。教職・信徒を対象として、夫婦セミナー、親子セミナー、高齢者セミナーを行っています。また、各教会で行っているファミリーミニストリーの情報交換の場を提供しています。日本同盟基督教団教育局ホームページをご活用ください。

教育がないがしろにされると、成長が阻まれます。受洗者減少も課題ですが、受洗者が与えられたにもかかわらず､そのまま留まることができずに教会を離れていく現状にも心痛みます。もちろんいろいろな事情があると思いますが、ここに「教える」ことの重要さを思います。それは、ただ聖書知識を伝達することではありません。「守るように教える」のですから、実行が伴います。みことばに聞き従うこと、みことばに生きることです。私たちは、従うことによって神さまのみわざを体験し、生ける神さまの恵み・あわれみ・力を知ることができ、変えられていきます。年数が経てば自然に成長するのでも、自分の力でイエスさまに似たものになるのでもありません。

成長させてくださるのは、神さまです。ですから、主イエスさまが約束してくださいました。インマヌエルと。私たちに委ねられていること―「出て行き」宣べ伝え「守るように教える」―を励まし合い、協力し合っていきましょう。

（習志野台キリスト教会牧師）

「鍵を握る信徒の献身（2）」

東京基督教大学（キリスト教福祉学専攻）
土浦めぐみ教会　井上貴詞

福音的な教会の「ふくしのミニストリー」は、「伝道と社会的責任の双方が教会の使命（MISSION）である」と悔い改めたローザンヌ世界宣教会議の「ローザンヌ誓約（1974年）」と切り離せません。第2回の宣教会議「マニラ宣言（1989年）」第16項では「地域社会に対する教会の責務」が語られ、第3回会議の「ケープタウンコミットメント（2010年）」では、私たちが世に仕えるための多面的な領域への行動が呼びかけられました。この「コミットメント」を読むと、「こんなに多くの働きを教会ができっこない」と目を丸くするばかりですが、主イエスの福音は全被造物に対する和解の福音であり、それらはあらゆる領域に派遣され、多様な賜物が聖霊によって与えられている信徒の存在と働きなしには実現しないといえるものです。実は、日本の福音派諸教会もすでに2000年の伝道会議「沖縄宣言」で「政治や経済、教育、芸術、福祉などとたえまなく関わっていくこと、社会全体に影響を与えていくことが、伝道とともに求められている」と告白しています。

さて、ここで「信徒」について少し歴史を遡って考えてみましょう。「信徒の重要性」は、宗教改革のひとつの発見でもありました。マルティン・ルターは、聖職者だけでなく信徒も、神の祭司として、その置かれているところで神の導きや召しを受けることができ（万人祭司論とか全信徒祭司性と呼ばれます）、隣人にとって「小さなキリストになる」という愛の奉仕を

強調しました。カルヴァンのジュネーヴでの改革は、地域社会の福祉改革をも包含し、町にあふれる生活困窮者たちが「総合施療院」においてケアを受け、その奉仕において信徒が活躍しました。まさに信徒（執事）によるディアコニア（愛の奉仕）の実践でした。

そして、17世紀から18世紀、正統主義神学が教条主義（ある特定の原理・原則に固執し、形式化・権威化する）に陥った時に、再び生きた信仰のいのちをもたらしたのは、敬虚主義やメソジスト運動に示される信仰復興運動でした。メソジスト運動の創設者ジョン・ウェスレーは、熱烈な巡回伝道と共に貧困者支援や各地の病人訪問活動を展開するために、信徒の班会と組会という共同体を作りました。会員（信徒）を病人や失業者の家への訪問、食物や衣服、石炭など生活必需品の具体的支援活動へと派遣したのです。ウェスレーは、日本で伝道と協同組合事業の創設に尽力した賀川豊彦にも影響を与えています。ウェスレーと同時代のウィリアム・ウィルバーフォースは、聖職者になるか政治家になるかを悩みぬき、やがて奴隷制度と貿易奴隷に反対し、人格の尊厳のために戦う政治家になりました（その半生を描いた「アメイジンググレース」という感動的な映画があります）。

さらに、20世紀、ローザンヌ誓約の草稿者ジョン・ストットは、「キリスト者たちが多様な神の召しを学び直さない限り、さらにはキリストに仕えるために社会の中に深く入り込んでいかない限り、（世の中の悪化を食い止める塩としての）効力を発揮しない」と訴えています。霊性の神学で知られる力ナダの神学校リージェントカレッジ教授で社会活動家でもあるチャールズ・リングマは、「キリスト教基礎共同体の鍵は、信徒の重要な役割、賜物とミニストリーの分かち合い、そして、それらメンバー全員がキリスト者として成熟し、世での奉仕に押し出されていくことにある」と指摘しています。

こうして少し歴史を紐解いてみても、プロテスタント教会が危機的な状況から脱出し、活性化する時には「信徒の働き」がいきいきした時であると教えられます。いえいえ、現代においてマザーテレサをはじめとする力トリックの慈善・福祉活動も、第二バチカン公会議以降劇的に変わった「信徒の神学論」抜きには語れません。

今日の日本に目を注げば、自殺者数は、ピーク時の10年前より減少傾向ですが、子どもと高齢者はむしろ増えているという事実はあまり報道されていません。耳を済ませれば、あちらこちらで子ども、障がい者、高齢者、外国人などの「いと小さき者」の救いを求めるたましいの叫びが聞こえます。主イエスがこの地上に今生きていればどうなされるでしょうか。包括的な福音に教会が生き、福音の豊かさを証し、分かち合うために、仕える奉仕に召し出される人を発掘し、育て、活かす教会を、主は喜び、地域で輝くように祝福されます。次回は、実際的、実践的なことについて言及します。

「その町のシャローム(繁栄、平安、平和、ふくし)のために祈れ」(エレミヤ書29章7節)

日本同盟基督教団「世の光 NO.826」（2019.7）

理事の声「羊飼いの喜び」

青少年局担当理事 西村 敬憲

「あなたがたのうちのだれかが羊を百匹持っていて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか」（ルカ15章4節）

羊の持ち主、あるいは羊飼いは、どこかにいなくなってしまった一匹を捜し歩いて、ついに見つけると、「喜んで羊を肩に担いで家に戻ります。その喜びは私たちの常識を超えるようなもので、「友だちや近所の人たちを呼び集め」ては、きっと宴会でも開いて「一緒に喜んでください」と招くのです。そのくらい、「一人の罪人が悔い改める」ことは「大きな喜びが天にある」ということです。これは、私たちを指している「一人」というものが神の前ではどれほど大切で大きいのかということがよくわかるたとえです。

一人ひとりを大切にするということは、私たちの生きているどの場所においても大切なことだと思います。そして、そのためにさまざまな努力が家庭でも学校でも職場でも続けられています。でも、実際にそれを貫こうとするとどうしても多くの壁に阻まれてしまうというのが、真剣に考えて行動しようする人に、のしかかってくる現実ではないかと思います。

それでもこれほどに一人の救いを喜ばれるイエスさまを目指して生きている私たちは、同じような喜びを求めていくことを続けていきたいと思います。それは、たとえば教会において次世代の宣教や育成ということの中でも問われていることだと思います。

私たちの教団が掲げてきた「ミッションテモテ21」という次世代宣教のコンセプトは、「一人ひとりを愛し、大切にする教会」を形成していくことです。そして最もその一人への集中を問われる世代が、中学生と高校生なのです。

同盟基督教団の教会学校の生徒数は約2100人ですから、単純に計算すると一学年が110人になります。そしてクリスチャン家庭からの受洗者数は昨年116人でした。大体が６年生前後で洗礼を受けていると考えるなら、驚くべき数字です。幼児から小学生を洗礼までどれほど教会が大切にしてきたのかがよくわかります。ですから、おおざっぱに言ってクリスチャン家庭の子どもたちは、ほとんどが洗礼へと導かれているわけです。その数は毎年100人を超えます。10年間ごとの合計（統計のある約30年間から計算）では常に1000人以上が洗礼を受けているわけです。

しかし、一方では厳しい現実があります。中学生になってからの教会学校への出席率は、激減して高校生なるころには礼拝への出席も減少し、さらに学生になって所属教会の移動などとともに教会生活から離れていく現象は、ほとんどの教会が経験していることです。教会に若い人がいない背景には、洗礼を受けている1000人の青年の半分以上が教会から離れている現実があり、このことと向かい合うことが、次世代宣教の一歩なのです。つまり、中高生一人ひとりを喜ぶ教会を作っていくことで、次世代宣教は大きく羽ばたけるのです。

フロンティア2019は、これまでより大きな規模での大会を準備しています。しかし、これまでと同じように、原点は一人ひとりに届いていく努力を惜しまないことです。今回は中学生も参加できるように準備をしていますが、スタッフはキャンプなどで中高生と深いコミュニケーションを積み上げてきた人たちです。それは、小学生のスタッフにも言えることです。そして、青年層を担当するスタッフもできる限り一人ひとりの状況を拾いながら、その必要に寄り添っていこうとミーティングを重ね、現場での対応にも備えています。

また、参加の呼びかけもスタッフの持っている中高生、青年とのネットワークやコンタクトを通して、一人ひとりに声をかけてきました。

教団の皆さまには、羊飼いの喜びが分かち合えるフロンティアとなるよう祈っていただければ幸いです。

（西大寺キリスト教会牧師）

イムマヌエル綜合伝道団「イムマヌエル教報 878 号」（2019.9）

「「ファミリー年会」の意義と目的～分断から融合へ～」

教団代表　内山　勝

「彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。」（マラキ４：6）

罪の本質は、神との断絶であり、それは裏返せば自己中心です。その罪の結果人類にもたらされたのは、分断と対立でした。世界は民族間の紛争にずっと苦しんできました。そして、夫婦・親子関係の断絶によって、さらに家庭崩壊が進んでいます。主イエスが世の終わりのしるしとして預言された通りです。

ところで、教会に与えられた使命は、分断されたものを融合し、対立のある所に和解をもたらす神さまのご計画を実現することにあります。一人ひとりが罪から救われたなら、その恵みは個人に止まらず家庭に広がり、夫婦・親子の関係に和解と修復の恵みをもたらします。主の驚くべきみわざに心から感謝します。

とはいえ現実には、教会の中にも世代間の分断が残存しているかもしれません。「最近の若い者は…」という年長者たちの嘆きや、「ああいう信仰者にはなりたくない」という青年たちの年長者への批判の声が聞こえないでしょうか。クリスチャン家庭の子どもたちが、成長と共に教会から離れて行く現象は、単に子ども個人やその家庭の問題として片付けられない、教会の体質的な問題を含んでいるかもしれません。

私たちが主に立ち返ることによってもたらされる恵みは、相互の遜りと歩み寄り、赦し合い仕え合うことではないでしょうか。それは、年長者の方から始めなければならないことです。

来年の春には「ファミリー年会」を予定しています。それは、子育て中の女性牧師たちに、参加の機会を差し上げたいということで、春休み中に神学院での開催をと企画した訳ですが、今回はせっかくの機会ですから、牧師家枠にとどめずに、教団を一つのファミリーと考えて、参加可能な「とにキャン・ＹＳ」世代の青年たちをも年会に迎え、彼らと一緒に福音を共有する恵みの聖会を開きたく願っています。

先ず牧師たちが遜って、次の世代を担っていく青年たちと真に向き合い、彼らをもっと理解し、もっと愛し、もっと仕えるための、きっかけとしたいのです。

ＪＥＡでも、次世代育成・次世代宣教の必要が訴えられています。確かに、教会単位、教団単位で、次世代にしっかりフォーカスしなければ、私たちに将来はありません。しかし、それは単に戦略的な意味でということではなく、福音そのものがもたらす恵みが、本質的に、分断から融合へ、対立から和解へという方向を持つものだからです。私たちが、もっとイエスさまに喜ばれる教会を目ざしたいのなら、親世代は子ども世代と積極的に向き合いましょう。そうすれば、彼らも、次の世代に喜んで向き合い、仕えるようになれるでしょう。そう信じ期待しようではありませんか。

日本ホーリネス教団「JHC Revival 847 号」（2019.5）

教会の将来を考える（12）

「自分たちの教会の将来を自分たちで考える」

教会教区再編委員長 佐藤 信人

昨年の 6 月号より、「教会の将米を考える」というテーマで、わたしたちの教団の厳しい現実をお伝えするとともに、様々な提言をさせていただきました。シリーズの最終号にあたり、まとめの言業を書かせていただきます。

2019 年度の任命表をご覧になってお分かりのように、昨年度末をもって三つの教会が巡回地、あるいは閉鎖となり、新たに兼牧となった教会が四つあります。さらに、3 月末に公表された 2018 年の全国教勢一覧表の数宇を拾い上げてみますと、礼拝出席人数が過去 30 年間で最低の数宇となった教会が 35 教会に上ります。全体の約 20％にもなります。

そのように、礼拝出席人数がこの 30 年間で過去最低を記録した教会では、様々な理由や事情というものがあることでしょう。小さな教会にとり、一つの家族が転出するだけでも大打撃となります。また、地方の教会では、毎年のように若者たちが、進学や就職で都市部へと出て行ってしまうということもあるでしょう。そして、高齢の教会員が相次いで召されたり、礼拝出席ができなくなった、という悲しみがこの数宇に隠されている教会も少なからずあることと思います。ですから、礼拝出席人数が最低を記録したからといって、それは必ずしも教会にどこか問題がある、というわけではないと思います。

その一方で、注日すべき点は、過去最低の礼拝人数となった教会は地方の教会だけではないということです。東京を始めとする都市部の教会においても、同じような現象が起こっているという事実は、わたしたちの教団だけでなく、日本のキリスト教界全体の問題であることを改めて認識させられます。

このような厳しい現実に直面して、教会教区再編委員会が一年かけて訴えてきたことは、掲げたテーマにありますように、「教会の将来を考える」ということをそれぞれの教会で、自分たちで行って欲しい、ということでした。 教団として出来る限りのサポートをさせていただきますが、最も大事なことは、それぞれの教会が自分たちで、自分たちの教会の将来を考える、ということです。今年は 3 年に一度、全ての教会から「任命に関する要望書」を提出していだく年です。 嬰望書を書く前に、ぜひ「教会診断チェックリスト」を活用し．自分たちの教会の現実を把握し、将来をみんなで考える、そういう機会を持っていただきたいと思います。全ての教会の将来の上に、主の導きと祝福が豊かにありますよう心からお折りいたします。

日本イエス・キリスト教団「JCCJtimes NO.800」（2019.7）

「見えざるもの、見えるもの」

「あなたの先祖が立てた古い地境を移してはならない。」（箴言22章28節）

教団委員 井上 義実

4月より教団での2年振りの働きに就きました。私の奉仕する荻窪栄光教会では新会堂献堂後、6年目を迎えました。新会堂当初からの五カ年ビジョンを終えて、新たに新五カ年ビジョンを策定し、4月より進み始めています。新しいビジョンを統括する大テーマは－継承と発展 －です。どの時代でもどの組織でも同じではないですかという批評もあるでしょう。今この時、私たちの教会にとっての課題であり、教団にとっても不可避の問題ではないでしょうか。

私事ながら昭和の初年、母方の祖父母はそれぞれ神戸で日本伝道隊の働きによって澤村五郎師から洗礼を受けました。私は母の胎から教団の教会で神様に触れていました。これは妄言と受け取られて結構ですが、教団の信仰を肌身で感じる思いがしています。私を教え導いてくださった先生方の信仰を思い起こすと、言葉や行動以上に生き様そのもので信仰を見せてくださったことを思い起こします。信仰は人格を通して表されていくことを感じざるを得ません。

私たちがそれぞれ真実に信仰に生きること、信仰を見せることが継承につながっていきます。同時に、見えざる信仰を見える形に紡ぎ出す努力がなければ、継承も危うくなるのではないでしょうか。私は今年度の札拝説教で、月一度ですがＢ・Ｆ・バックストン師の「赤山講話」（著作集第一巻）を一篇ずつ取り上げるように導かれました。私たちの信仰の源流にあって、誰もが汲むべき恵みの泉ではありませんか。本文を何度も読み備えますが、模倣、解説のつもりではありません。今、私たちに向かって語られている神様の使信は何であるのか、御心を示していただこうとしています。

私たちが受け継いだ信仰はあってあるものですが明文化、具現化しにくいものです。信仰とはそういう性格のものだから仕方がないではなく、生きる信仰を伝える努力、受け止める力を求めていこうではないでしょうか。自分とは何かを知っていることが全ての基となるからです。そこから神様への感謝が生まれ、御愛に応答して宣教へと向かうことができるのです。

日本イエス・キリスト教団「JCCJtimes NO.802」（2019.9）

「宣教の力－初期キリスト教徒たちの実践から学ぶもの」

教団委員　横田 法路

「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」（使徒行伝1章８節）

今日の日本宣教を考える時、初期キリスト教の宣教から学ぶべきことが多くあるように思います。特に大切と思われることを、お分かちしたいと思います。

① 初期キリスト教の宣教の拡大と教会の成長

あのペンテコステ時には、数千人が救われた。キリスト教徒は数的にも目覚ましい成長をとげ、ＡＤ300年には、600万人がキリスト教徒になったと推定されます。ローマ帝国の人口の約10%にあたります。ＡＤ350年には、3300万人で、ローマ帝国の総人口比約56%に達しました。多少の数字に誤差があったとしても、初期キリスト教は驚異的な成長をとげたことは確かでしょう（ロドニー・スターク『キリスト教とローマ帝国』）。

② 教会の成長の要因－キリスト者の「魅力的な」生き方

それではそのような成長をもたらした要因はどこにあるのでしょうか。初期キリスト教史家のアラン・クライダーによれば、初期キリスト者たちの「魅力的」(attractive) 生き方が宣教の力となったのです。職場や店先で異教徒との交わりが始まり、友情が育つなかで、非キリスト者は、キリスト者が魅力的で

興味がそそられる存在であることを発見します。キリスト者は「どのように生きるべきかを知っていた」からです。

そのようなキリスト者の魅力的な生き方の一つは、癒しをもたらしたり、迫害にも耐えさせる霊的な力(spiritual power)でした。それは特に、祈りを通して与えられました。

第二は、ローカルな価値観からある程度自由となる「寄留の他国人」としてのアイデンティティーとその日常の生き方でした。彼らは、グローバルなネットワークをもつコミュニティを形成したり、さまざまな社会層がキリストにあって一つとなって生きるコミュニティを形成していました。

第三は、みなが共通に抱えている社会的な課題に対し、ユニークな方法で取り組むキリスト者の行動です。その代表が、自然災害や疫病が蔓延する中でのキリスト者の行動です。災害で苦しんでいる人々や死にゆく人々（しかもその中にはつい数年前まで自分たちを迫害していた人たちも含まれる）を、いのちがけで看病し、神の愛を示しました。永遠のいのちが自分たちには与えられているという確信や、愛と信仰のコミュニティに属していることが、このような生き方を支えたのです。

このような「魅力的な」生き方が、長期的に見たとき、ローマ帝国内の福音宣教の前進に大きく貢献したのです。

ウェスレアン・ホーリネス教団「聖潮 NO.325」（2019.6）

「教団の明日を考える」中間報告

2019年会実行委員長　山田　証一

昨年の年会において、「教団の明日を考える」というセッションを実施しました。全参加者が教団の将来に関する諸テーマを論じる機会を設けました。大テーマですからすぐまとまるものでもなく、委員会に託され、2020　年からの次期10年ビジョンに反映するため継続検討中です。今年の年会で報告できなかったため、聖潮誌にて報告の機会をいただきました。

議論を総括すると、いま各教会がやっていることの紹介がほとんどで、互いが今必死でやっていること、不安も課題も全部言い合い、互いに聞き合いました。「教団の明日を考える」までには届きませんでしたが、ともかく自分たちの教会の現況に向き合ったことは決して無駄ではないでしょう。

2018年度に常任委員会、9月の全体委員会、教職セミナーにおける分科会にてさらに検討を深めました。諸テーマについていまだに現状の問題認識にとどまり、取り粗みの手がかりを掴む段階に至っていません。「なんとかしなくてはならないと案じてきた課題、それを口に出し、難しい現状を良く知った。そして事態はさらに散らかった状況」です。でもそれが大切なのです。散らかってはじめて本当にやらなければならない「取り組み」が明らかになります。現在討議中のテーマは以下のような内容です。a 新時代の伝道と宣教、b 教師継続教育や支援、待遇制度の検討（社会的保障や引退について）、c 次世代育成（青年、保育など）、d　教会が直面する社会的課題との関わり（高齢化、多様さへの対応等）、e 教会や教団の財政、組織体制の見直し等。　これらは今年度の重点事業項目にも関連したものです。

今後、いくつかの「取り粗み事項」について、教団の将米に必要か。有効か。そもそも取り組めるのか。それを取捨選択し、吟味していきます。さらに取り組み事項（目標）をどこまで、どのようにしていくか（期限、進め方）を設定します。そうすることで2020年以降の次期10か年計画として、「わたしたち WH 教団はこれらのことに取り組みます！」というアクションプランが見えてくるでしょう。

地に足の着いた取り粗みをしていきましょう。主を仰ぎ、一歩一歩進むわたしたちですが、それしかないのです。お祈りください。

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団「アッセンブリー News NO.761」

「教会だからこそできること」

教育局長・企画室長 大津キリスト教会(滋賀県) 野口 一郎

「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」(I ヨハネ1章3節)

一人で暮らす人が増えています。

7人に1人が一人で暮らしており、単身世帯は全世帯数の中で最も多く、3割超と言われています。今後もこの傾向は続き、一人で暮らす期間も長くなると考えられています。

Twitter や Facebook など SNS も有益ですが、十分ではありません。そのためでしょう、つながりを目的とした活動や行事も多く、居場所作りに取り組む団体も様々あります。誰もが親しく信頼できるつながりを求めています。

この状況で、私たち教会には可能性があります。

教会は、年齢や立場や文化が違う人たちが定期的に集まります。初めての人を歓迎できます。食事をいっしょにし、喜ぶ人をお祝いし、悩む人とは涙をともにします。 子どもたちは親以外の大人たちに見守られ、高齢の方には「教養(きょうよう：今日、 用がある）」と「教育(きょういく：今日、行くところがある）」の場です。顔を合わせることができなくても、お互いを思い起こし、祈ります。教会にとって当たり前のことは、 実は人々が求めていることです。

さらに、教会でなければできないことがあります。それはすべての人にとって最も必要である、神と人とのつながりの回復です。

愛と信頼の関係を求めているのに、そこで傷つく人が何と多いことでしょう。しかもその人たちには原因がわかりません。教会は、罪こそ、その原因だと知らせることができます。そして、神がその人を限りなく愛してくださっていること、キリストが罪から救い、聖霊が心を変えてくださることを伝えることができます。教会が祈るとき、神との関係が回復し、人との関係が根本的にいやされ、人生が建て直されます。私たちだけがこの福音を伝えることができるのです。

どんなに小さく見えても、私たち教会はとてつもなく大きな影響をこの世に与えることができます。なぜなら、教会にはキリストが満ち満ちておられるからです。

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団「アッセンブリー News NO.768」

「変革への挑戦」

東北教区長 郡山キリスト教会　三箇 豊実

人は誕生したら「成長」することが当然と考える。しかし「変革」という言葉を当然と受け入れるのは難しい。

キリストのいのちにより生かされている教会が「成長」するという言葉は受け入れ易いが、教会の「変革」というと尻込みしそうだ。

「わたしを信じる者は、わたしの行なうわざを行ない、またそれよりもさらに大きなわざを行ないます。わたしが父のもとに行くからです。」（ヨハネH章 12 節）

主イエスは、聖霊によってこの地上に生み出されていく教会（キリストの体）に、「わたしの行なうわざを行ない……さらに大きなわざを行なう」という期待と信頼をもって語られた。聖霊ご自身が教会をリードし、神の御業を進めると知っておられたからだ。

では今、私たちも教会も主イエスの行なわれた御菜を行なう者たちとして、大胆に「成長と変革」に取り組んでいるだろうか。成長や変革は、「今」の状態から別の状態、別の行動、別の姿へと変わっていくことだ。

先日、21 歳の息子に対し、「小学生の時には一年間で 2、3 足、靴を買い換えたよ」と愚痴

った。息子は鼻で笑っていたが、身体的な成長は嬉しい事であり、同時に手間やお金の掛かることだった。
私たちは聖霊の力によって進むペンテコステの群れとして、これまで多くの働きに取り組み、実を結んできた。その本質は変わらない。ただ現代社会の変化とニーズ、これから起こることを想定し、「この時代の人々と地域社会に必要とされリードするキリストの体」であるため、勇敢な信仰と挑戦が必要だ。
信仰生活の中で、体力的、年齢的、環境的に「成長はしたいが変革は……」と様々な理由での躊躇も当然。しかし主の私たちへの期待は「今」も変わらない。然も、主の再臨が近づいている今はなおさら。
「変革」とは私たちが何者で、何か私たちの内に満たされているかを再確認することでもある。様々な心配も主に委ねつつ、ワクワクと期待しながら変革に取り組もう。何故なら、必ず、取り組む者の先頭に立って導かれる聖霊の力を、目の当たりにするからだ。
主はこの時代を私たちに委ねられ、イエスが行なった御業を行なうために選んでくださった。私たちが慣れ親しんだ方法を、聖霊の導きによって勇敢に変革し前進することを待っておられる。新しい奉仕や役割、地域の新たな領域に出ていく時、学びや準備にお金が掛かり、体力へのチャレンジもあるかもしれない。しかし、その必要も主が必ず備えてくださる！

日本キリスト合同教会「合　同 NO.422」（2019.6）

「神の国のリアリティーを」

日本キリスト合同教会教師 品川 謙一

すると エリシャは、「恐れてはならない。わたしたちと共にいる者の方が、彼らと共にいる者より多い」と言って、主に祈り、「主よ、彼の目を開いて見えるようにしてください」と願った。主が従者の目を開かれたので、彼は火の馬と戦車がエリシャを囲んで山に満ちているのを見た。（列王記下 6 章 16～17 節）

昨年 11 月､国内の外国語教会が集まって日本宣教のために祈る Bless Japan Prayer Summit が開催されました。在日フイリピン教会のネットワークである JCPC （Japan Council of Philippine Churches）が中心となって、中国、ネパール、ボリビア、ブラジルなど各国の在日教会メンバー100 人以上が集まり、神様の祝福と活気に満ちた集会となりました。印象的だったのは、彼らが自分たちのためだけでなく、日本の宣教のために何か役に立ちたいと強く願っているということでした。

日本の在住外国人数は 2017 年 6 月時点で 247 万人、国内の外国語教会の数も増えており、第 6 回日本伝道会議（JCE6）に合わせて出版された『データブック本宣教のこれからが見えてくる』によれば、日本在住の各国人数にそれぞれの本国のクリスチャン人口比率をかけて合計した日本国内の外国人クリスチャン数は約 70 万人と推計されています。これは日本人クリスチャンの数 105 万人（キリスト教年鑑 2016）に匹敵する数で、彼らを合わせると日本のクリスチャン人口は 1.38%、日本に住むクリスチャンの 5 人に 2 人、約 40％が外国人クリスチャンということになります。

冒頭の聖句で、アラム王によって差し向けられた大勢の軍隊を見て恐れたエリシャの従者の若者には、神様のリアリティーが見えていませんでした。エリシャの祈りによって主が彼の目を開いてくださった時、彼はそこに大勢の神の軍勢がいることを悟ったのです。日本国内の外国人クリスチャンの推計値を知ったときのわたしの気持ちは､まさにこの従者の気持ちでした。

日本はクリスチャン人口が少なく、宣教も困難であると意気消沈してしまいがちなわたしたちに、神様はこれだけ多くの日本宣教のビジョンをもった外国人クリスチャンたちを送ってくださり、地上における言葉や文化は違えども、同じ天の国籍を持つ同労者として協力して神の国を拡げ、福音を宣べ伝えていくよう励ましてくださっていると感じています。神様が見せてくださる神の国のリアリティーをしっかりと見て、国内の外国人教会、クリスチャンたちと祈りと力を合わせていきたいと願います。

あとがき

酷暑続きの8月がやっと過ぎ、9月に入ったと思ったら急に秋の涼しさが感じられるようになりました。千葉県内では、台風15号の影響で大規模停電や断水が続き、厳しい生活を強いられている地域が多くありますが、皆様にはお変わりないでしょうか。被害に遭われた方には、お見舞い申し上げます。

さて、ここに第16号を発行することができることを感謝いたします。今回号の巻頭言は、日本同盟基督教団土浦めぐみ教会の主任牧師として29年間牧会され、今年の4月に顧問牧師となられた清野牧師に寄稿していただきました。清野牧師は、クリスチャン人口1%に対し、現在教会生活をしていない「自称クリスチャン」がさらに2%、約200万人おり、これらの人を**「教会難民」**という新たな言葉で呼ぶことにより、ややもすると内向きな、キリスト教会内部にのみ目が行きがちな状況に対して、キリスト教会を取り巻く周辺状況にも目を向けることの大切さを喚起していただいたように思います。

この調査データは、2006年、2014年に行われた「ギャラップ調査」で、日本のクリスチャン人口は6%（若者は７%）で潜在的な信者が多数いると報告されていることと、数字は異なっても相通じるものがあると言えます。（ちなみに、萬代氏の調査で「自分の葬儀の形式は何を希望するか？」との問いに対し、仏教系16.9%、キリスト教系が4.2%との回答があった。）

しかし、より正確を期して補足させていただくと、実は「１%のクリスチャン」の中にも、教会籍はあっても「別帳会員」として既に教会生活から離れているような人も含まれています。（主要教団の教会員数に対する別帳会員の比率は、約30%を超えている。）

従って、一旦は教会籍を持ち教会員になったが、何らかの事情で教会生活から離れ「教会難民」になった人と、教会籍を持たないが、自分ではキリスト教信仰を持っていると自称する「教会難民」の2種類があると言えるのではないかと思います。

このような、クリスチャン人口の倍以上いる「教会難民」を、正規の「教会の民」として取り込めていないばかりか、逆に様々な事由があるにせよ、自ら「教会難民」を作り出しているのが現状の教会の実態だと言えます。このことは、闇雲に「教会の数」を増やそうとする前に、現状の「教会の体質」そのものについて、今一度自らの在り方を振り返ることを、私たちに迫って来る問題と言えるのではないでしょうか。

すなわち、「教会難民」がそれほど多いということは、現状の教会が「教会難民」にとっては教会生活を送るだけの魅力がなかったり、教会生活に問題を感じるからであり、或いは「別帳会員」のように、本人の信仰の問題もさることながら、往々にして牧師へのつまづきや教会内の人間関係、紛争等、教会の器や度量の狭小が教会から離脱する原因であると言われていること等から考えれば､現状と同じような体質の教会を増やすことによって｢クリスチャン人口｣を増やそうとするよりも、現状の教会の在り方を、「教会難民」を作り出さない魅力のある教会、或いは「教会難民」が「Come back」したいと思うような教会となしていくことの方が、より本質的な問題ではないかと思います。

それは、いみじくもイムマヌエル綜合伝道教団の内山代表が言われるように（P.16）、教会の体質が、「分断されたものを融合し、対立のある所に和解をもたらす、福音の恵みに溢れる教会」を、真に具現化することと言えるのではないでしょうか。　　（初穂）

献金者名（2019 年 7 月～2019 年 9 月）

◎尊いご支援に、心から感謝申し上げます。（敬称略）

崎山清、柴田美枝子、中野覚、松原正幸、柳下弘、日本聖契キリスト教団、本郷台キリスト教会

【イベントのご案内】

史上初 キリスト教に特化した大規模終活イベント!!

事前申込受付開始！！

「キリスト教目線から考える」

ライフエンディングフェア2019

新しいライフエンディングサポートの「かたち」を探る1DAY

HP：www.life-works.co.jp/life-ending-fair2019.html

10.14 Mon.祝 事前申込制※

▶12:30-18:00

入場無料

※当日受付は入場料1000円
※事前申込は裏面をご覧ください

大田区産業プラザPiO

無料

OPEN SEMINAR
専門家たちの講演で疑問もスッキリ解消！
公開終活セミナー

無料

CONSULTING
どんな疑問・質問も対面で納得いくまで
終活相談ブース

SPECIAL LECTURE & TALK SESSIONS

【Guest Speaker】
宗教学者　作家
島田　裕巳

1953年東京生まれ。東京大学文学部宗教学宗教史学専修課程卒業、東京大学大学院人文科学研究課博士課程修了。放送教育開発センター助教授、日本女子大学教授、東京大学先端科学技術研究センター特任研究員を歴任。現在は作家、宗教学者、東京女子大学非常勤講師。主な著書に、『キリスト教入門』（扶桑社新書）、『葬式は、要らない』、『浄土真宗はなぜ日本でいちばん多いのか』（幻冬舎新書）など。とくに、『葬式は、要らない』は30万部のベストセラーになる。『ブア充』（早川書房）、『０葬』（集英社）などは、大きな話題になるとともに、タイトルがそのまま流行語になった。

【Panelist】
大和　昌平
東京基督教大学 教授
神学部 学部長

【Panelist】
浦上　哲也
浄土真宗 倶生山慈陽院
なごみ庵 住職

【Moderator】
松谷　信司
株式会社 キリスト新聞社
代表取締役社長
「キリスト新聞」編集長

OPEN SEMINAR

<クリスチャン行政書士>
■松下 愛
「相続と諸手続き」

<クリスチャン相続診断士>
■高橋 まどか
「争続をなくして笑顔相続のために」

<クリスチャンウォーキング指導士>
■富所　正史
「終活と健康」

<遺品整理士>
■吉住　聖
「遺品整理から見える終活の必要性」

限定20社
ブース出展募集!!

▶出展対象
キリスト教葬儀、またはキリスト教における終活のサポートを目的とした製品・サービスを提供する個人、または団体

▶早期申込特典あり
（ブース料3万円→2万円）
【早期申込締切：7月31日】

▶備考
出展内容のご相談随時受け付けております。
出展は個人・団体問いません。
まずはお気軽にお問合わせください。

クリスチャンライフエンディングネットワーク協会
ライフエンディングフェア2019実行委員会
TEL：0120-370-392

LIFE ENDING FAIR FROM CHRISTIAN PERSPECTIVE

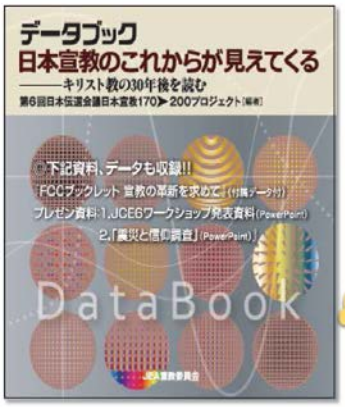
協賛：東京基督教大学 国際宣教センター
プレス・ユア・ホーム株式会社
行政書士法人 松下崎山事務所
有限会社トップ・スペース
社会保険労務士アスリート事務所
フューネラルカンパニー グロリアス

主催：クリスチャンライフエンディングネットワーク協会
（株式会社 創世 ライフワークス社）

【お申込み・お問合せ】
ＴＥＬ:0120-370-392　FAX:0467-81-3929

【刊行物紹介】

データブック
『日本宣教のこれからが見えてくる』
CD-ROM 版（好評発売中）



グラフや図がカラー
表も見やすい
有用なデータが満載
プレゼン資料も収録
定価 1,000 円＋税

【CD-ROM の内容】

- 『データブック「日本宣教のこれからが見えてくる」－キリスト教の 30 年後を読む』
- 『データブック FCC ブックレット 宣教の革新を求めて』(付属データ付)
- プレゼン資料： 1. JCE6 ワークショップ発表資料（PowerPoint）
  2.「震災と信仰調査」(PowerPoint)』

【編著】第 6 回日本伝道会議「日本宣教 170 ▸ 200 プロジェクト」
東京基督教大学国際宣教センター 日本宣教リサーチ
【発行】日本福音同盟（JEA）宣教委員会

キリスト教葬儀研究会

日本宣教におけるキリスト教葬儀
開かれたキリスト教葬制文化を目指して

巻頭言　倉沢正則
一般葬儀とキリスト教葬儀の現状　柴田初男
日本の葬送儀礼の宗教的背景　大和昌平
葬儀論から日本宣教論へ　稲垣久和
近代日本における死者儀礼と教会　篠原基章
－キリスト教葬制文化を形成していくために－
未信者にも開かれたキリスト教葬式を求めて　倉沢正則
キリスト教葬制文化開拓のケース・スタディ　清野勝男子
付記「ｷﾘｽﾄ教葬儀に関するｱﾝｹｰﾄ調査」報告書　日本宣教ﾘｻｰﾁ
まとめ　大和昌平
コラム 1～5　終活セミナー開催の理由他　野田和裕

NO.10　February 2018

東京基督教大学　国際宣教センター

定価 1,000 円+税
好評発売中

【お申込み・お問合せ】
E-mail:fcc@tci.ac.jp　FAX:0476-31-5521

感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ（JMR)は、今年の4月で発足から6年目を迎えます。旧教会インフォメーションサービス（CIS）の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2019 年度も、2018 年度と同様、「JCE6「日本宣教 170➤200 プロジェクト」の流れを引き継ぎ、JEA(日本福音同盟)宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の課題である「次世代育成」「地域宣教ネットワークの構築」「教会の再生」に取り組んでいきます。

どうか引き続き JMR の働きにご期待くださり、**更なるご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。**

JMR の活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

（1）**特別賛助会員**：趣旨に賛同し、支援してくださる教団・教派、宣教団体等
- 一口 30,000 円（何口でも）
- シンポジュームや研究会・研修会等の開催のご案内
- 毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」のご提供
- 毎年 1 回「JMR 調査レポート」のご提供

（2）**一般賛助会員**：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等
- 一口 2,000 円（何口でも）
- シンポジュームや研究会･研修会等の開催のご案内
- 毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」のご提供
- 毎年1回「JMR 調査レポート」のご提供

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金(献金)は、税額控除制度の認定を受けているため、
税制上の優遇で還付金が最大で寄付金(献金)額の約 50%となります。

詳しくは、☎0476-46-1131(TCI 募金係)までお尋ねください

郵便振替口座:00110-5-575648　学校法人　東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

＊ お振込みの際には、**振替用紙に「日本宣教リサーチ　指定」と必ずご記入ください。**
（振替用紙がお手元にない場合はこちらよりお送りいたします）

東京基督教大学　国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347　千葉県印西市内野三丁目 301-5
学校法人　東京キリスト教学園　東京基督教大学　国際宣教センター内
TEL：0476-31-5522　FAX：0476-31-5521　E-mail：jmr@tci.ac.jp
http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr
日本宣教リサーチ代表　　山口　陽一（東京基督教大学学長）
日本宣教リサーチ研究員　　柴田　初男